



目次

一、維新の動乱と宰平の登場

生い立ち  
別子銅山の危機克服  
広瀬宰平の登場  
新政府への出仕  
相変わりにおめでたく候

二、別子銅山と新居浜の近代化

ラックの雇い入れ  
別子銅山の近代化へ  
逆名利君の人材登用  
老分から総理代人へ

三、殖産興業と国益志向

朝鮮貿易と商社へ  
製糸事業と生糸の直輸入  
海運の近代化と大阪商船設立  
欧米巡遊と別子銅山鉄道  
東の渋沢、西の広瀬  
植林事業と石炭事業への進出  
製鉄・化学事業への挑戦

四、宰平の引退と家族

広瀬宰平の引退  
宰平と家族  
最後の逆名利君  
晩年の宰平  
エピソード  
新居浜広瀬邸の望煙楼  
参考文献

補遺 宰平銅像の復元

あとがき



# 維新の動乱と宰平の登場

## 生い立ち

文政十一（一八二八）年の五月五日、広瀬宰平は父北脇理三郎（満馨）・母三根の次男として、近江国野洲郡八夫村（現、滋賀県野洲郡中主町）で生まれました。実家の北脇家は、歴代八夫村の村役人などを勤め、父理三郎は村医でもありました。天保五（一八三四）年、別子銅山勤務の叔父・北脇治右衛



宰平の生誕地全景(中主町提供)  
生か北脇家は、琵琶湖と野洲川に囲まれていた。  
号(保水)は、野洲川にちなむ。

門の養子となり、同七（一八三六）年九歳のとき、叔父にしたがって伊予（愛



別子鉦山圖(明治7年)村瀬雙石(住友史料館所蔵)  
廣瀬宰平が別子銅山の偉大さを漢文と英文で記す。

媛県)の別子銅山に行くことになりました。そのとき、母三根が見送ってくれましたが、「こんな小さな子が、りっぱに勤めあげることができたらどうか」と心配したそうです。

別子銅山は、元禄四（一六九一）年以来、大阪の豪商住友家の経営でした。天保九年一月、一歳になった宰平は、働ける年齢に達したので、正式に住友家の店員となり、別子銅山に勤務しました。長いサラリーマン生活の始まりでした。

当時の勤務制度は、丁稚奉公といって、元服（成人）して一人前の手代（店員）になるまで、給料のない使い走り（店員）の仕事でした。時には、先輩のいじめにも合い、何度か故郷に帰りたいと思いましたが、歯を食いしばってがんばりました。仕事の合間には、愛用の辞書を片手に独りで勉強しましたが、どうしても分らないときは、夜間に銅山役人の家を訪ね質問しました。それでも分らないときは、文通で京都の叔父北脇淡水に尋ねましたが、叔父は京都で「曼殊院親王」という高貴な家に仕えた高名な漢学者でした。

宰平一八歳の弘化二（一八四五）年八月二十四日、母三根が四三歳で亡く



大全早引節用集  
宰平独学の辞書

なりましたが、まだ半人前の身分、帰るのを許されたのは、嘉永元（一八四八）年一月「中登り」と称して、住友家主人へのお目通りが許されたときでした。同五年十二月十五日には父が六二歳で亡くなり、故郷には兄で医者の方次郎と、住友を退職した叔父の治右衛門が住んでいました。

幸平に転機が訪れたのは、安政二（一八五五）年四月、二八歳のとき、住友家第一〇代当主・友視のはからいで、広瀬義右衛門（義泰）の養子となったことでした。初代広瀬義泰は、もともと美濃国安八郡神戸村（岐阜県安八郡神戸町）の農家出身でした。次男だったので住友家に奉公し、別子銅山勤務を経て浅草出店（札差）支配人にまで昇進し、退職後は新居浜の金子村で農家となりました。広瀬家は、新居浜でもかなりの資産家となっており、幸平がその養子となったことは、その後の活動の幅を広げることになりました。

よって、人の生き方や事業経営のあり方について学んだのでした。

### 別子銅山の危機克服

住友家は、長崎からオランダ・中国に輸出する棹銅を生産していました。当時、銅の輸出は徳川幕府の銅座によって管理されていきましたので、住友の産銅事業そのものが国家と深い関係のある事業でした。言い換えれば、別子銅山の事業は、「国家の利益」とは何かを考えさせるものがあつたのです。

広瀬は銅の流通を通じて、幕府が倒れそうなこと、ヨーロッパやアメリカなどの強国が中国を植民地とし、やがて日本もねらっていることなど、日本の置かれた危うい状況を知ることができました。事実、慶応二（一八六六）年には松山に來航した異国船を見に行き、いよいよわが国も大変だぞと肌身で感じたのです。

また、広瀬は単なるデスクワークだけで昇進した経営者ではありませんでした。幼少の頃から別子の山に住み、坑内へもたびたび入りながら、莫大な鉦脈の眠る宝の山であることを現場の



別子銅山図屏風(天保11年)桂墨癡(住友史料館所蔵)

幸平が銅山に勤務して2年後、別子開坑150年祭を迎えた。これはその記念品であり、当時の様子を生き生きと伝える。廣瀬家旧蔵品



川田小一郎 (川田龍吉伝より)  
天保7年 - 明治29年(1836 - 1896)  
実業家、高知県生まれ。明治維新、土佐藩士として別子銅山の接収に当たる。明治6年岩崎弥太郎と共に三菱商事の設立に関与し、22年日本銀行総裁となる。我が国の金融制度確立に尽力した。

人間以上に知り尽くしていたのです。いわば「別子の申し子」ともいえるべき経営者だったのです。

それゆえ広瀬は、慶応四(一八六八)年二月、別子銅山の接収に訪れた土佐藩(現在の高知県)の川田小一郎に対して、真つ向から理論闘争を挑みました。別子銅山は確かに幕府領であるが、住友家が発見し、独力で経営してきたものである。しかしながら、新政府がこれを没収し、経験のない者に任せたいということであれば、それは国益に反することになる」と訴えたのでした。広瀬の国益思想は、心から国家を思う気持ちでありました。出願の心構えとして広瀬は、「何ら、空言はいっさい相成らず、諸事潔白実意を尽くし申さずては、貫徹仕らず候」と述べて、う

そ偽りのない真心を伝えたいと言っています。土佐藩の川田にもじゆうぶんその真意は伝わりました。川田も土佐藩だけのために命がけで仕事をしているわけではなかったのです。心を突き動かされた川田は、広瀬と一緒に京都に上り、両者から新政府へ出願することになりました。川田は、土佐藩主の山内容堂を通じて正面から、広瀬は叔父の北脇淡水や、北脇要人(広橋大納言家の用人)のツテによって裏面から、公家の屋敷に出入りしましたが、新政府の副総裁岩倉具視邸にはたびたび訪れました。後に岩倉は、宰平に宛てた書状のなかで、「益を国家に拡ぐるがごときは、すなわち保水(宰平)の素志なり」と賞賛しています。こうして、同年三月、広瀬と川田の尽力によって、



岩倉具視 (『岩倉公実記』より)  
文政8年 - 明治16年(1825 - 1883)  
公家・政治家。京都出身。討幕運動を推進し維新後は新政府の副総裁になる。条約改正準備の為特命全権大使として欧米各国を歴訪



新政府から正式に別子銅山の継続経営が許可されたのでした。川田は後に三菱の創設に関係し、日本銀行の総裁となった人物ですが、当時はまだ下級役人でした。しかし非凡な才能をもつこの両者の出会いが、その後の住友発展の契機となったのでした。

### 広瀬宰平の登場

明治維新のとき、住友家の重要案件は大阪本店の支配方という組織で決議されました。明治元（一八六八）年当時の支配方構成員は、日勤老分補助・鷹藁源兵衛を筆頭に、日勤老分・今沢卯兵衛、同・清水惣右衛門、支配人・松井嘉右衛門、副支配人・竹中小兵衛の五人でした。またそのまわりには、守旧派ともいうべき、先祖伝来住友家に仕えてきた門閥系の末家集団がいました。

鷹藁は天保十一（一八四〇）年、本店支配人に就任して以来、約三〇年あまり住友を指導してきた大長老であり、今沢、清水は別子支配人から日勤老分となった人物でした。当時、官軍に接



廣瀬宰平（明治10年代）  
50代の宰平、口髭のない珍しいもの

収されそうになった別子銅山の経営権をめぐって、土佐藩の川田小一郎と丁々発止の交渉をやりあった別子支配人・広瀬宰平は、住友家の序列でいうと支配人・松井に次ぐナンバーファイブの地位でしかありませんでした。

慶応四（明治元）年三月、広瀬はようやく新政府から別子銅山の経営権を確保したのですが、大阪本店の重役は、別子銅山の経営難からこれを一〇万円で売却しようとしていました。本店重役はその一時金で「イエ」の存続を図ろうとしたのです。

しかし広瀬にとつて、「イエ」とは個人ではなく、住友の名前を冠して働くもの全てでした。慶応二（一八六六）年の大みそか、広瀬が京都へ行き幕府の勘定奉行へ銅山稼ぎ人の食料米を嘆

願したときの漢詩に、その気持ちがよく現れています。

五千人の命、孤身に聚まる

風雪いづくんぞ辞せん、万苦の辛  
除夕、いまだ成らず救荒の議

枉げて宿志を懐き、新春に向かう

意識すると、「五千人の命が、独りわが身に集まっている。風雪ぐらいにどうして引き下がるうか、もろもろの苦しみ、つらさに立ち向かうのみである、除夜の鐘が鳴るといふのに、稼ぎ人を救う米の許可は下りない、まして新年を祝う気分などなれない、初志貫徹の思いを懐いて新春に向かおう」ということになるでしょう。

広瀬にとつて、五〇〇〇人の稼ぎ人とその家族すべてが住友家のファミリーでした。広瀬は、この素志に基づき本店の重役と大激論を交わし、血涙を注いで別子銅山売却という暴挙を食い止めたのです。以後、広瀬は住友家のファミリーを救うため、ときに本店に相談せず、独断で別子銅山の改革を断行しました。

明治二（一八六九）年、広瀬は義右

衛門から宰平とみずから改名しましたが、その由来について「幸にも、人々をまとめ差別するような地位に付くことがあれば、公平にすべての事物を判断・判断したいと、心に誓っていたからである」と述べています。

「宰平」への改名宣言は、とりもなおさず総理代人就任への決意表明と見られることもできるでしょう。

### 新政府への出仕

明治元（一八六八）年九月、広瀬は別子銅山の出願を通じて新政府にその力量が認められ、鉱山司の役人に任命されました。誕生後間もない明治政府は、その人の経歴や身分にかかわらず、才能ある人物を抜擢したのです。

広瀬は、生野鉱山・伊豆金山の視察を命ぜられました。生野鉱山ではフランス人の御雇外国人・コワニエと出会い、黒色火薬を用いた近代的採鉱法を教わりました。そこで広瀬は、別子銅山の再生には西洋技術の導入以外に途はないと確信するのでした。



生野鉱山図（明治4年）（住友史料館所蔵）  
明治元年・4年、宰平が新政府の役人として勤務した鉱山。  
この鉱山で、コワニエと出会い、別子鉱山近代化のヒントを得た。  
題字・讀とも宰平の直筆である。廣瀬家旧蔵品

別子銅山への事業結集を図るためには、不採算となつている事業を切り捨てる必要がありました。広瀬は、同年十二月、伊豆金山視察のついでに東京に立ち寄り、中橋両替店（現在の中央区八重洲一丁目付近）と浅草札差店の金融店部を閉鎖しました。ただし、入店四年目の小池鶴三など、将来に見込みがあると思われる人材はリストラしないで、大阪本店へ連れ帰っています。広瀬は、明治元年十一月一日に大阪の鉱山司を出発してから道中日記を記

していましたが、当時としては珍しい、西洋ノートに鉛筆書きでした。

これによると、十一月十二日、伊豆蕨山で県令・江川太郎左衛門英武のもてなしを受け、十二月十四日には東京で、古銅吹所を鉱山司出張所として接収しています。その帰途十二月二十九日、近江八幡西宿（現滋賀県近江八幡市西宿町）に姉の嫁ぎ先である伊庭家を訪れて、姉夫婦や、京都御所禁衛隊の任を解かれて帰郷していた甥の伊庭貞剛と新年を過ごしました。

翌二（一八六九）年一月七日には「一昨日京都で小騒動があり、参与の横井平四郎殿が暗殺されたようであり、そのため、警護の場所は嚴重である」と記しています。政府の重鎮・横井小楠の暗殺事件に遭遇した広瀬は、京都の騒然とした様子を伝えていきます。

広瀬はこの旅で、わが国の置かれている状況をつぶさに見聞し、別子銅山を事業の中心に据える重要さを改めて確信したのでした。その後、三井・三菱・古河・藤田・久原（日立）が、官

菅鉦山の払い下げによって重工業を展させた経緯を考えますと、広瀬の経営路線には先見性がありました。

しかし、明治の初め住友の経営は火の車でした。別子銅山の近代化をしようにも、当面の経営資金にも事欠く有様でした。経営を圧迫していたのは、旧大名貸の債権一八万両や、政府借用の買請米（鉦夫用飯米）代金八万八五〇〇両など多額の借金でした。明治二（一八六九）年、広瀬幸平は、これらの債権回収と借金返済に奔走するとともに、山銀札という別子山内限りの私札を発行して金融の緩和に努めました。翌年、広瀬は別子近代化資金を得るため、わが国最初の銀行であった大阪為替会社に出資し、融資の引き出しに成功しました。



山銀札（明治2年）（住友史料館所蔵）  
別子銅山の資金難を緩和するため、廣瀬幸平が自分の名義で発行した。発行札は6種（30目、10匁、5匁、1匁、3分、2分）、金1円は山銀70匁に換算した。

### 相変わりておめでたく候

明治二（一八六九）年四月、広瀬は別子の近代化に専念するため、いとも簡単に鉦山司の役人をやめています。役人としての地位や名誉より、実業の世界で国家に貢献することを望んだのです。江戸時代の住友の事業は、幕府から長崎輸出銅すべてを買い上げてもらっていたので、経営体質はどう見ても役所任せの仕事でした。明治政府も、当初は鉦山司で銅を一手に買い上げていました。明治二年二月に銅の自由売買を通知しました。さらに、鉦山労働者用の飯米払い下げや、その代金の繰り延べ返済制度も撤廃すると通告してきたのです。これにより住友家は、銅を自力で外国に販売し、六〇〇〇石余にもおよぶ飯米も自前で確保しなければならなくなりました。広瀬は東京の大蔵省へ出張し、従来どおりの方法で飯米を支給してほしいと必死に嘆願しましたが、大阪本店の人々の時代をわきまえない、ぬるま湯的な体質はいつこうに変わっていませんでした。

明治三（一八七〇）年正月五日、東京の帰りに新年宴会に出席した広瀬は、やり場のない憤りから、満座の人々に「相変わりて御めでたく候」とあいさ

つしました。守旧派の重役や末家たちはこれを耳にすると、日本古来のあいさつは「相変わらぬ」であるとして、広瀬の言葉は不吉であると責め立てました。すると広瀬は、「今日において最も切実にお願したいのは、旧いことを捨て、新しいことを取り、禍を転じて福としたいのである。幸平が今日の宴会を祝うのに、ことさらに世間の慣例に反して、相変わりてと申し上げたのは、うそ偽りのない心から発したことで、住友家将来の万歳を祝福し、御家運が以前にもまして隆盛になるよう、祈ったからにはほかならないのである。」と、自説をとうとうと述べました。広瀬は、この文明開化の時勢に、旧習にこり固まったままでは滅亡するぞ、いまこそ変革をしなければならぬと言いたかったのです。

それからの広瀬の行動は素早いものでした。明治三年閏十月、神戸に製銅販売の仮出店を設けると、翌年二月には正式に神戸出店としました。そして外国商館へ銅の売り込みを図ったのです。鉦山労働者用の飯米は、山口県下関などの国内市場から調達するいっぽう、新居浜周辺の田畑を買い入れて自給できるよう努めました。

## 一、別子銅山と新居浜の近代化

### ラロックの雇い入れ

明治二年二月、広瀬は生野鉱山の役人だったとき、政府のお雇外国人コワニエから西洋の採鉱技術を学びました。同年四月別子銅山に帰ると、さつそく黒色火薬を鉱石採掘に応用しましたが、その火薬を鉱脈に挿入するための鉄棒を考え出し、山の盛大繁栄を願う意味からこれを「盛山棒」と名付けました。この「盛山棒」は、その後関西地方の鉱山で広く用いられたということです。広瀬は、生野鉱山勤務の経験から、別子銅山の近代化には、外国技術の導入しかないと決断しました。明治五年（一八七二）には、コワニエの別子視察を願い、七年（一八七四）一月には周囲の反対を押し切って、フランス人技師・ラロックを雇い入れました。広瀬は、新居浜・金子村（現愛媛県新居浜市久保田）の自邸にラロックを宿泊させましたが、当時の人々にとって青い目の外国人は珍しかったので、広

瀬邸をもの珍しげに取り囲み、なかには石を投げ入れるなど、ふとどきな行動をとる人もいたようです。そんな時代だったのです。ラロックの採用を大阪本店が反対したとしても、それは無理もないことでした。

ラロックの月給は、広瀬の六倍にあたる六〇〇円という高給でしたが、彼はそれに見合う「別子鉱山目論見書」という近代化プランを完成させました。ラロックは、別子を調査するうちにこの山の魅力にとりつかれ、契約終了後も引き続き雇ってほしいと懇願しまし



ブルーノ・ルイ・ラロック

1836 - 1883

フランス人鉱山技師。パリ鉱山学校を卒業後、大学で化学教授。リエンタール商会の斡旋で住友と契約、別子鉱山で近代化プランを作成。

たが、広瀬はこれをきっぱりと拒絶しました。官営鉱山の経営失敗を目の当



ラロックの「別子鉱山目論見書」（明治8年）（住友史料館所蔵）

本文全23章と付録14冊からなる膨大な報告書。別子近代化のバイブルとなった。

りにしてきた広瀬は、外国人技師に頼ることなく、自らの力で近代化を達成しようとしたのでした。

明治九（一八七六）年二月、広瀬は技師養成の観点から、通訳として外務省から雇った塩野門之助と店員の増田芳蔵を、フランスへ留学させました。それと同時に、ラロックのプランを参考に起業方針を定めて、別子銅山の本





**塩野門之助** 嘉永6年 - 明治8年(1853 - 1933)  
 鉱山技師。鳥取県出身。外務省からラロックの通訳として住友に入社。フランスに留学し、帰国後、惣開製錬所、四阪島製錬所を設計した。わが国初の転炉を開発。

格的な近代化に取り組みました。

### 別子鉱山の近代化へ

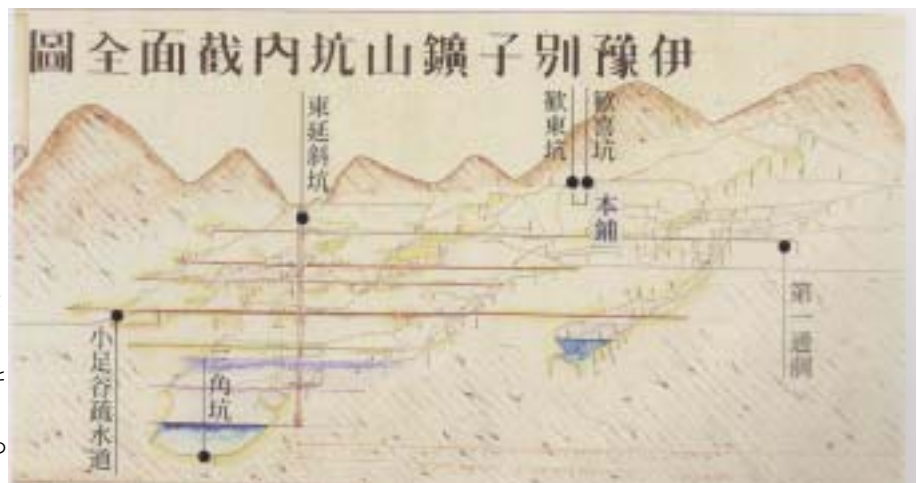
広瀬のとつた事業方針は、自己資金で着実に進めるというものでした。そのため、資金の余力はすべて別子鉱山の近代化へと向けられていきました。別子の近代化を実施するにあたり、広瀬は「再三再四熟考したうえで、その計画を作成し、そのうえで着手すること。物事をあわただしく進めると、必ず弊害が生じるものであり、これは私が言うまでもないことである」と、慎重かつ確実に実施するよう諭しています。

明治九(一八七六)年二月二十四日、広瀬は、フランス人技師・ラロックの

「別子鉱山目論見書」を参考に、東延斜坑の開削、牛車道の着工など、採鉱・運搬の近代化方針を指示しました。採鉱近代化の主眼となったのは、東延斜坑の開削でした。幕末期、安政元(一八五四)年の大地震によって、「三角」と呼ばれる富鉱帯が水没してしまいました。この富鉱帯を再び採掘するためには、アリの巣のように狭く曲がりくねった従来の坑道では不可能でした。水抜き坑道と近代的な堅坑がどうしても必要だったのです。



**別子鉱山の近代化企業方針書** (明治9年)(住友史料館所蔵)  
 廣瀬幸平がラロックの目論見書を参考に策定。採鉱、精錬、運搬の近代化を慎重・確実にと指示。



**伊予別子鉱山坑内縦面全図**  
 (明治28年)(住友史料館所蔵)  
 水没した三角の富鉱帯に向け、東延斜坑が延び、これと連絡する横坑道が描かれている。江戸時代のアリの巣のような旧坑道との対比が面白い。



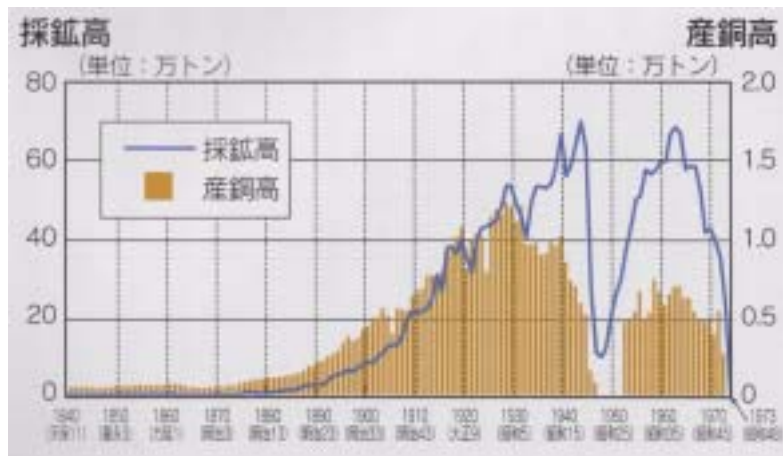
**第一通洞南口** (明治14年) (住友史料館所蔵)  
江戸時代以来の鑛着をまとった鉱夫。アーチ型石積み of のトンネルや鉄軌道・トロッコに近代化の息吹を感じさせる。

明治元(一八六八)年八月、広瀬は、周囲の反対を押し切って中断していた小足谷疏水道の開削を再開し、十九年十二月に全長九四〇メートル余りが完成しました。これにより、三角富鉱帯のわき水を効率よく排水できるようになりました。明治九年(一八七六)七月には、海拔約一一五〇メートルの東延から、四九度の傾斜角で八番坑道レベルの「三角の富鉱帯」(海拔約七五〇縦幅二・七メートルの斜坑を掘り、一

番から八番坑道まで八本の横坑との連絡を目指しました。斜坑全長五二六メートルのむずかしい工事でしたが、明治二八(一八八五)年二月まで、一年の歳月をかけて完成しました。これにより採鉱高は、明治元年五六三メートルであったものが、同十九年二万八五四トンとなりました。それからの増加はめざましく、二十一年には早くも三万〇五〇六トン、二十八年には六万〇七六八トンと倍増したのです。

また、別子鉱山は海拔一三〇〇メートルを超える高所にありました。物資輸送は、その経営を左右する重要な生命線だったので。江戸時代から、物資の運搬は、中持衆という運搬夫に頼っていました。広瀬はこの方法に限界を感じていました。明治九年、鉱山から峠を越えて新居浜まで約二八キロの牛車道建設に着手して、十三年十一月に開通させました。

明治十五(一八八二)年二月には、峻険な銅山越えの運搬ルートを回避するため、第一通洞というトンネル工事に着手しました。ラックは、日本人だけの力では不可能であると反対しましたが、広瀬はダイナマイトを導入し



**採鉱高・産銅高の推移**

広瀬幸平の明治近代化によって、大正、明治期の大増産が実現した。

て、四年後には全長一〇二メートルをみごと貫通させました。こうした近代化にともない、広瀬はおおぜいの運搬夫を解雇しました。その恨みを買って、登山中に乗った山駕籠もろとも谷底へ突き落とされそうに

なったこともありました。もちろん広



**惣開製錬所**（明治23年5月）（住友史料館所蔵）  
操業2年目の勇姿。重厚なレンガ造りに近代化の息吹が感じられる。

**惣開製錬所設立願と許可書**（明治15年12月、同17年5月）（住友史料館所蔵）  
惣開生臨書の設立許可書は、工都新居浜の出生証明書である。

瀬はこうしたことにひるむことなく、リストラすべきときは断固実行し、近代化によって始まる新たな事業において雇用を確保しようしました。

明治十五（一八八二）年に塩野がフランスのサンテチエン又鉾山学校を卒業して帰国すると、広瀬は直ちに新居浜の海沿い、「惣開」というところに洋式製錬所を建設したいと政府に出願しました。明治十七（一八八四）年五月、この願は工部卿の佐々木高行から許可され、明治二十一（一八八八）年十一月に操業を開始することになりました。この間、熔鉱炉が煉瓦式から鉄製の水筒炉に、送風方式も鞆から送風機になり、熔鉱炉一基当たりの製錬高は吹床の五〇倍に達していました。これにより、産銅高は明治元年四二一トンであったものが、十三年一〇一〇、二十三年には二〇二五トンとほぼ一〇年ごとに倍増し、二八年には三二二二トンと三〇〇〇トンの大台に乗ったのでした。新居浜も、一農漁村から煙突の林立する臨海工業都市へと変貌しつつあった

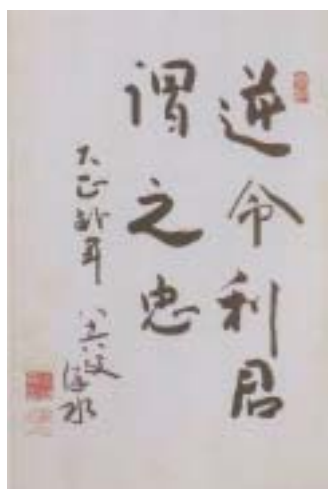
のです。この製錬所の許可証は、いわば工都新居浜の出生証明書であり、住友の事業が鉾山業から各種事業へと派生していく契機となったのです。

### 逆命利君の人材登用

これらの事業をやり遂げるには、確固とした信念をもつ人材を集める必要がありました。広瀬宰平は亡くなる前年の大正二（一九一三）年、「逆命利君、謂之忠（命に逆らっても君を利す、これを忠という）」との書を認めましたが、これを生涯の教訓としていました。本當の忠義とは、上司や主君の命令、たとえ国家の命令であっても、それが主君のため国家のためにならなければ、あえて逆らわなければならない、という強い意志が表れています。これは、中国の古典「説苑」に出てくる四つの言葉のひとつで、その対極にあるのが、「従命病君、為之諛（命に従いて君を病ましむる、之を諛と為す）」という言葉であります。「諛」とはへつらうこと。へつらうて

命令に従うのは、主君を病気にし、国家を腐敗に導くことになる、という意味です。広瀬はおべつか遣いのイエスマンを、もつとも嫌ったのです。

広瀬が、当主・友視や上司の今沢卯兵衛、清水惣右衛門によつて抜擢されたように、明治の元勳たちも、彼らのよき理解者であつた主君や上役に登用されました。薩摩藩（現在の鹿児島県）の下級武士であつた西郷隆盛や大久保利通は藩主・島津斉彬に、長州藩（現在の山口県）の木戸孝允・大村益次郎は上役である周布政之助に、武蔵国（現在の埼玉県）の農民であつた渋沢栄一は一橋家の平岡円四郎によつて見出されました。激動の明治維新は、「逆命利君」の人材でなされたと言つても過言ではありません。広瀬も自分と同じよ



逆命利君の書（大正2年）  
東京の住友銀行の館蔵

うな、「逆命利君」の志士を広く登用しました。伊庭貞剛（司法省）、田辺貞吉（文部省）、塩野門之助（外務省）、大島供清・広瀬坦（工部省）などは官界からスカウトし、長谷川健介・阿部貞松・小池鶴三などは生え抜きの店員から引き立てました。彼らは、意見の相違からときには広瀬と衝突しましたが、家法の制定、別子銅山の近代化などを達成した信念の人々でした。衝突はしても、人を引きつけてやまない強烈な魅力が、広瀬にはありました。広瀬は事業の目的を次のように宣言しています。

「住友氏は四百年來鉅業に従事しているの、その家法も、みずから慣習から出たものが少なくない。しかしながら、その営業の方針は、いまだかつて自分だけを利するような傾向をみることはできないのである（中略）、それゆえ、私も及ばずながら、姿勢はつねに公利公益を旨として営業の針路を取りたいのである」。

スカウトされた人々は、明治維新のとき川田が魅了されたように、広瀬の説く住友の事業精神に惚れ込みました。

生前の伊庭貞剛は、叔父の広瀬を「元龜・天正の英雄じゃ」と評していましたが、広瀬はまさに織田信長のような乱世に強い指導者なのでした。

### 老分から総理代人へ

明治五（一八七二）年二月、広瀬は住友家の老分末家という地位になり、翌月別子銅山支配人の後見役を命じられました。住友家での発言力も強くなったので、六年三月大阪本店に先駆けて、別子銅山での月給・等級制と能力主義人事の採用を宣言しました。月給・等級制の採用では、「今日文明開化の域に至り、無能頑愚の者、上等に座し、その権を振るい候謂われ、これ無き候こと」と、言い放っています。すなわち、文明開化の時代になったのだから、昔のように無能で頑固で愚かなものが上役として居座り、権限を振るう理由はないというのです。真つ向勝負の重役批判を行ったのです。これでよくクビが飛ばなかつたものですが、住友家には店員の意見を採用する伝統がありました。明治維新に際しても店員一同に、緊急の苦難を救う方策があれば、新古

老若に関係なく、だれでも遠慮なく上申するようにと申し渡しています。このような風土が、広瀬宰平を生んだともいえます。またおそらく、本店の重役たちは広瀬のうそ偽りのない訴えに圧倒され、腹に据えかねることがあつても、広瀬の、政府やその他への外交手腕は認めざるをえなかつたのでしよう。

明治六（一八七三）年十月、広瀬は一二代当主・友親から、別子銅山近代化のための外国人雇い入れ事務を委任されました。住友家の当主による権限委譲の最初でした。これを機に、広瀬は大阪での活動を活発化し、海運に便利な安治川河口の富島（現在の西区川口四丁目）に出店を設け、大阪・鰻谷（現在の中央区島之内一丁目）の本店から店舗を移しました。

明治八（一八七五）年六月、広瀬は老分から日勤老分に昇進し、住友家の全事業に参画できるようになりました。同年十二月、最長老の清水惣右衛門が引退しますと、本店支配方のメンバーは日勤老分・広瀬宰平、支配人・岐村清兵衛、同・村田謙一郎の三人になり

ました。広瀬時代の到来です。ときに宰平四七歳。さつそく、広瀬は長年の懸案でありました家と店との完全分離を図り、大阪・鰻谷を本店、富島出店を本店と呼ぶことにしました。

明治九（一八七六）年一月には、住友家の当主を家長と呼ぶように決め、同年八月家長・友親の名で「本家第一之規則」全十力条が出されました。その第二条では「予州別子山の鉱業は重大である、万世不朽に我が所有する不動産であり、他に比べるもがないほどである。よって、後来の利害得失をはかつて、勉勵指揮しなければならぬ」と規定しました。住友家では、家長が万世不朽のではなく、別子銅山すなわち事業こそが万世不朽であるとしたのです。それでは、家長はどう位置付けられたのかといえますと、第十条において、「嫡子であつても、ふさわしくない者からは、その権限を奪い、次男や二女のなかからふさわしい人を選ぶこと」と規定しました。家長は、番頭が選ぶというのです。「君臨すれども統



**住友家法**（明治15年）（住友史料館所蔵）  
明治14年、自由民権運動の高まりのなか、多くの私擬憲法が発案されたが、広瀬宰平も住友家法を制定した。

治せず」という住友家長の立場が明らかにされたのです。おそらくこれは明治維新に際し、本店重役に別子銅山を売却されようとした苦い経験から、広瀬が家長に進言して挿入させたものでしょう。ちなみに、この「本家第一之規則」が明治十五（一八八二）年の住友家法における家憲の母体となりました。

明治十（一八七七）年二月十四日、広瀬宰平は家長・友親から総理代人を委任されました。その委任状には「私は多くの病気を抱えているので、あなたを総理代人と定め、左の権限のことを代理したい」とありました。こうし



住友家総代理人委任状(明治10年)(住友史料館所蔵)  
住友家第12代、友親から広瀬宰平に宛てたもの。これにより  
宰平は、住友家の事業一切の権限を有した。

て、使用人の広瀬は、オーナーである住友家長のいっさいの事務を総轄して、あまたの雇い人を統御することになりました。ここに、住友家の総理代人(後の総理人・総理事)・広瀬宰平が誕生したのであります。なお明治十八(一八八五)年、我が国で最初の内閣総理大臣が誕生しましたが、総理という名称の使用はこれより八年も早かったこととなります。

### 三、殖産興業と国益志向

#### 朝鮮貿易と商社へ

明治初期、わが国の商業・貿易は安政の不平等条約によって、欧米先進国に利益を独り占めにされていきました。明治四年二月、広瀬は住友神戸支店での銅販売を通じて、居留地の外国商館が取引の権利を牛耳り、いばっていることに腹立たしく感じていました。明治八(一八七五)年一月、広瀬は神戸支店を通じて外国商館に、銅代金の売り込み手数料を五パーセントから二パ

ーセントに減額すると一方的に通告しました。また、これに先立つ明治六(一八七三)年には、銅以外の貿易にも着手したいと、当時三井物産の前身、先収社が行っておりました米輸出を見習い、イギリス、オーストラリアへの米輸出をも試みています。

明治十(一八七七)年、広瀬は商権回復の一環として新たに朝鮮貿易に挑みました。彼自身は欧米諸国に支店を開設したく思っていたのですが、それ



住友の朝鮮釜山支店図(明治13年)  
欧米進出への手始めとして、設置した商社。釜山港には、大小の船が停泊し、その手前の支店には、住友商事の旗が翻っている。

だけの實力はまだありませんでしたので、隣国の朝鮮から始めようと考えたのです。明治十三(一八八〇)年九月、広瀬は朝鮮の釜山・元山両支店を視察しました。朝鮮におけるわが国の商権を高めるためには、過去の歴史にこだわって現地の人々を蔑視しないように、また欧米人に対しては卑屈な態度をとらないようにと指摘しています。しかし、明治十五(一八八二)年、朝鮮で内乱が突然発生し、商権が中国人の手に渡ってしまったので、その翌年には朝鮮貿易から撤退しました。

## 製糸事業と生糸の直輸出

広瀬宰平は、かねてから殖産興業の志が厚く、明治十年（一八七七）から二十年代にかけて、住友家の事業をそれまでの銅山業から製糸業・再製茶業・樟脳製造業にまで広げ、輸外型産業の育成に努めました。広瀬は自伝『半世物語』のなかで、製糸業への進出理由を「生糸は、わが国第一の国産にして、必ずや国家的の観念をもって有力者が、まさに興すべき事業であることを確認したるが故に」と述べています。

明治十二年十月、広瀬は京都の野村揆一郎から上京区竹屋町にある製糸場を買い取り、翌年七月西京住友製糸場を開業しました。ところが、京都は繭の集荷や生糸の輸出、工場用水や人件費の面で立地条件は必ずしも良いとはいえませんでした。また工場そのものが他人の設計で小規模でしたので、生糸製造高は〇・七五から一・一トン前後と将来の発展は期待できませんでした。明治二十一年十月、広瀬はこれら

の諸条件を満たす地として、繭の多さと水質の良さを求めて、日本武尊の「居醒泉」で有名な近江国坂田郡醒井村（現、滋賀県米原町）を選定し、ここに近江住友製糸場を開業したのでした。

広瀬にとって、製糸事業は、まさに殖産興業のための国家的事業でしたし、それ相応の有力者が起業しなければならぬものという考えがありました。創業費は、五万四二七五円七五銭余り、製糸機械とその蒸気機関はフランス国リヨンのベルトウ会社製で、二万三〇〇〇円を要しました。繰糸釜数は九六個で、一釜に四つの取り口があり、乾燥仕掛を有する最新式のものでした。事実、明治二十六年『時事新報』の記者は、その状況を「さすがに豪商の所有だけに、結構すごぶる大にして、他の製糸所に比して大いに趣を異にする所あり。」と記しています。明治二十二年から三十四年まで一三年間の生糸製造高は、四・二から八・九トンの間で、年平均にすると、五・九トンとなり、当時の業界では中規模程度の生

産高でした。

また、広瀬は住友神戸支店での銅輸出を通じて外国商館の不正を知り尽くしていましたが、生糸の輸出はわが国の生糸売込商に委託しました。明治二十二・二十三年の両年にフランス向け生糸を横浜同伸会社に委託してそれぞれ一・二トン、二・七トンを輸出しました。明治二十四年広瀬は、住友みずから輸出に当たるため、神戸支店の子息満正に外国商人への売り渡しを命じましたが、突然破談となってしまうしました。同年九月五日、広瀬宰平は満



近江住友製糸場と商標（明治20年代）（住友史料館所蔵）  
滋賀県醒井村（現、米原町）に設立された製糸場。明治期のわが国では、外貨を稼ぐため生糸、茶が重要な輸出品であった。宰平は、国益のため率先して進出した。製糸の商標は、海外輸出を意識して「自由の女神」とした。

正あての手紙の中で、外国商人がいかに我が国の商権を掠奪しているか、また我が国の商人には資本力がなく商権というものを理解していないため、外国商人のずるがしこい手口に引つかかっている現状を嘆いています。翌二十五年、神戸支店は再度横浜・神戸両港から直輸出に挑戦し、フランス向け生糸五・二トン売り捌きましたが、外国商人に相場より安く買いたたかれてしまいました。明治二十六年以降、住友近江製糸場の生糸は直輸出を断念し、横浜の生糸売込商に販売されることになりました。当時住友の生糸は、市場で高く評価されて、明治二十七年京都で開催された内国勸業博覧会では、フランス製の機械を用い、良質の生糸を生産し、多年海外に輸出して信用を得た」として、進歩一等賞の賞牌を賜りました。また、その商標は海外輸出を意識して、自由の女神像を採用していました。

その後、明治三十六年（一九〇三）六月、広瀬宰平が心血を注いで設立した近江住友製糸場は、大阪の原弥兵衛に売却されました。製糸事業は、製糸

を専門とする実業家の手にゆだねられる時代となったのです。しかし宰平は、輸外型産業の振興を自家の事業と位置づけていましたので、すでに明治七年から愛媛県新居浜の広瀬邸を本拠に、長男満正に製茶・養蚕業を開始させていました。同三十三年には孫娘艶香の婿に農学士で農商務省蚕業講習所技手の河原次郎を迎えました。婿養子となつた広瀬次郎は、『蚕体病理』『蚕体生理』『広瀬式養蚕法』の養蚕三部作を著し、また新居浜に農学校や「広瀬式養蚕伝習所」を開校して農民の指導に当たりました。宰平の夢は、子孫によつて着実に継承されたといえるでしょう。



**広瀬次郎**（明治6年 - 昭和27年（1873 - 1952））  
実業家・教育者・河原徳立の次男で東京出身。東京帝国大学卒業後、農商務省に、広瀬家の婿養子となり、郷土の発展と養蚕の普及に努めた。

**広瀬満正**（安政6年 - 昭和3年（1859 - 1928））  
実業家・貴族院議員、宰平の長男で新居浜出身。東京、京都でフランス語を学び、帰京後茶園経営を受け継ぎ、県内外の会社設立に参画した。

## 海運の近代化と大阪商船設立

江戸時代、四国別子銅山への物資輸送は海運でした。明治四（一八七一）年一月、海運の重要性を熟知した広瀬宰平は、政府が鉄道建設ばかりに目を向けていることに反対し、「海運業振興建白書」を提出しています。これによると、「鉄道は、わが国のように周りを海に囲まれた国で必要でしょうか」と疑問を投げかけ、「環海のが国では、蒸気船が便利であり、鉄道建設を政府の方針としたことは富国の遅れになる」と反対しました。その理由として、「西洋人の言うままに借金して、鉄道にばかり資力を投じると、身ぐるみはがれて、中国のように四方を西洋に制圧されて、近代化の達成がおぼつかなくなる」と述べています。要するに、投資する資金があれば、蒸気船を購入して、海運業を振興すべきであるという意見でした。結局、この意見は採用されませんでした。広瀬は住友の事業でその活路を見いだすことになりました。

明治五年十一月、広瀬はイギリス人から中古の木造蒸気船神戸丸（五四ト





**白水丸** (明治10年前後)(住友史料館所蔵) 神戸港停泊中の勇姿。2本マストのスクリュー型蒸気船であった。幸平は、海運業を興し、イギリスのような産業・貿易立国を目指していた。

ン)を一万七五〇〇円で購入し、住友の屋号泉屋にちなんで「白水丸」と命名しました。その後、明治七(一八七四)年から十四年にかけて回天丸(七六トン)、富丸(トン数不明)、安寧丸(三四〇トン)、康安丸(一二五トン)、九十九丸(七九トン)を購入もしくは新造して海運業に進出しました。その航路は、大阪・神戸から四国・山陽・九州・朝鮮にまで及びました。しかしまもなく、外国汽船や大手の三菱汽船、共同運輸会社(このふたつは合併して日本郵船となります)や、中小の汽船会社が入り乱れてのサービス競争が始まりました。さらに明治十三(一八八〇)年には、老朽化した白水丸の船体にむち打って航海に出発しましたが、瀬戸内海の小豆島沖で汽罐破裂によって沈没してしまいました。広瀬は、中小の船会社の悲哀をかみ締めまし

た。外国汽船や三菱汽船など大きな船会社と対抗するためには、弱小の船主を団結させる必要を痛感したのです。明治十七(一八八四)年五月一日、広瀬は西日本の弱小船主五五名(現物出資の船舶九三隻)を結集して大阪商船会社(現在の商船三井、資本金一〇〇万円)を設立しました。みずから初代頭取(社長)に就任して、住友から安寧丸・康安丸の二隻を現物出資させました。広瀬は開業式の演説のなかで、「その目的は、大いに運輸の利便性を開発することであり、諸産業の産出が盛んになるようにうながし、交易をい



**大阪商船本社社屋** (明治時代)(商船三井「創業百年史」より) 大阪府北区富島町時代、当時隣に住友本店もあり、幸平は両社のトップを兼務していた。

よいよ頻繁にして、国家文明の万分の一でも助け補いたいのである」と述べています。海運業は、わが国の殖産興業を支える重要な事業であると宣言しました。その後の大阪商船(現、商船三井)は、外国航路を開拓し、日本郵船とならぶわが国の二大商船会社に成長したのです。

### 欧米巡遊と別子鉱山鉄道

海抜約一三〇〇メートルを越える別子銅山の運搬路は、明治十三(一八八〇)年新居浜港から銅山まで牛車道が開通していましたが、明治二十年年代の産銅高急増には対応できませんでした。明治二十二年一月、大阪商船の新居浜航路開設にともない、新居浜 端出場間の下部鉄道、端出場 石ヶ山丈間の索道、石ヶ山丈 角石原間の上 部 鉄道敷設を 出 願 し 許 可 さ れ ま し た が、着工には至っていませんでした。

明治二十二(一八八九)年五月、広瀬幸平は還暦祝に夫婦でアメリカ・ヨーロッパを旅行しましたが、その途中北アメリカ・ロッキーマウンテンのコロラドセントラル鉱山で、断崖絶壁を縫うよ

うに走る山岳鉱山鉄道を見ました。六月八日の日記には、「開坑処々、鉄路ノ左右岩間二坑口ヲ見ル、我邦鉱山ノ状況も亦大同小異」と記しています。厳しい鉱山の条件は、アメリカの鉱山と同じなのだから、鉄道敷設がアメリカ人にできて日本人できないわけがないと、別子鉱山鉄道の実用化に自信をもったそうです。

これにより、明治二十六年三月には新居浜の平野部、惣開から端出場間の約一〇キロを走る下部鉄道が、同年八月には海拔約一〇〇〇メートルの石ヶ



広瀬幸 (明治22年) 嘉永2年~大正12年(1849~1923)  
広瀬幸平夫人。大阪難波播磨本庄兵衛の長女。明治8年26歳の時幸平と結婚。22年の欧米巡遊には名刺を持って同行するなど、活動的な女性であった。



広瀬幸平の「欧米巡遊日記」(明治22年)  
西洋ノートに鉛筆書き。遺暦を過ぎてはなお、欧米の先進技術を導入する熱意に燃えていた。別子銅山鉄道はこの巡遊の成果である。

山丈から角石原間の約五・五キロを走る上部鉄道が開通することになりました。同年二月には、ドイツ国ミュンヘンのクラウス社から、松山の「坊ちゃん列車」とまったく同じ型の蒸気機関車を購入して、ドイツ人のガルランドを運転指導者として雇い入れました。上部鉄道の蒸気機関車は、各部品に分解して、牛車や人間が背負って海拔約一〇〇〇メートルの現地まで運び上げ、再び組み立てたそうです。まさに別子鉱山鉄道は、わが国最初の本格的な山岳鉱山鉄道でありました。これにより、運輸高は明治十三年五・八トンでしたが、鉄道開通後の二十七年には八三・八トンと激増しました。広瀬はその喜びを次のような漢詩に表しています。

他産業と相同じからず  
無尽蔵中赤銅を採る  
問はんと欲す国家経済の事  
半天鉄路一条通ず

意識すると、「別子銅山の事業は、ほかの産業と違って、地中深く赤銅を掘る事業なのである。この産銅事業から私は国家経済のことを問いたいのである。今やこの険しい山々の中空に、も

うもうと煙を吐いて蒸気機関車が走っているではないか」ということになるでしょう。別子の事業から国家経済のことを質問したいと意気込む姿に、実業家広瀬幸平の真骨頂をみる思いがします。

### 東の渋沢、西の広瀬

広瀬は、未熟な民間資本を育成するため、財界でも活発に活動しました。明治十四(一八八一)年四月九日、大阪財界の立役者でありました五代友厚(旧薩摩藩士)は、政府の重鎮・大隈重信に宛てた書状のなかで「広瀬君は、住友家の総理代人である。明治維新の危急のときに同家を救い、今の隆盛を取り戻したのはまったく彼のおかげである。私は広瀬君を自分の左右の腕と考えている」と、最大のほめ言葉をもちて紹介しています。事実広瀬は、五代の女房役として多くの会社設立に関与しました。明治十一(一八七八)年大阪商法会議所の副会頭、同十二年大阪株式取引所の副頭取、大阪硫酸製造会社の頭取、同十五年関西貿易社の副総監、大阪製銅会社の社長、十七年



**五代友厚**（『五代友厚伝記資料』より）  
天保6年 - 明治18年（1835 - 1885）  
実業家、鹿児島県出身。明治維新後官界から実業界に入る。大阪商法会議所、大阪株式取引所の設立など大阪実業界の基礎を確立した。

大阪商船の頭取、二十二年日本銀行監事などを歴任しています。

こうして、広瀬は新居浜だけではなく、関西財界の発展に力を尽くしたのです。明治二十二年十一月、広瀬は大阪商法会議所に会員一五〇名余りを集めて、アメリカ・ヨーロッパ視察旅行の帰国報告を行いました。そのなかで、「大阪が繁昌するためには、ぜひとも港を築かなければならない、その繁昌は世界を見渡しても、ニューヨークのハドソン川、ロンドンのテムズ川、パリのセーヌ川のように、水の利に基づくものなのである。大阪はこれらの都市と比べて地勢的に劣るところがないのだから、ぜひ良港を築いてほしいものである。」と述べています。広瀬は、大阪をニューヨークやロンドンのように

な商都にしたかったのです。その悲願は、没後に大阪南港・北港と工業地帯の建設によって達成されたのでした。

明治二十五（一八九二）年七月十九日、広瀬宰平は、殖産興業につくした功績によって、渋沢栄一（第一銀行頭取）、古河市兵衛（足尾鉱山経営者）、伊達邦茂（北海道開拓者）とともに、民間人として初めて明治勲章（勲四等瑞宝章）を受章しました。それまでの勲章は、官吏（公務員）にしか授けられなかったのですが、同年賞勲条例が改正されまして、民間人でも国家のためにつくした者には授与されることになりました。すなわち広瀬を含め、先の四人がその第一号となったのです。同年十月十九日、関西でただひとりこれを受章しました広瀬は、その祝賀会



**渋沢栄一**（『渋沢栄一』より）天保11年 - 昭和6年（1840 - 1931）  
実業家。埼玉県出身。幕臣ながら維新後大蔵省に入るが辞職し、第一国立銀行を設立。多くの企業を育成し、明治25年、明治勲章を受章。

で二〇〇名におよぶ紳士、豪商に対し「今や実業界の人でも勲位に叙せられる道が開かれたのである。諸君には、これからいよいよ実業に力を尽くしていただき、国家の公益を図り、二等三等はもちろん、一等の勲章を拝受する光栄をになつてほしいものである」と謝辞を述べました。実業界で働く人々に夢と希望を与えたのでした。



**明治勲章と勲記**（明治25年）  
渋沢栄一らと共に、民間人として最初に受賞。

## 植林事業と石炭事業への進出

別子銅山の近代化にともない、製錬燃料としての木炭や、坑道を支える坑木の需要が急増し、周辺の山林は切り尽くされてしまいました。広瀬幸平は、今後の木材需要を考えて、山林の長期利用を計画しなければならぬと、つねづね考えていました。すでに、幸平二三歳の嘉永三（一八五〇）年、別子山会計の本役として材木山の事務を兼勤していたとき、先哲の「百年の謀は徳を積むにあり、十年の謀は樹を植るにあり」という格言に感心して、鉾山近傍の山間に杉苗を栽培したと語っています。これを裏付けるように、明治九年以前に植林した檜・杉の生育本数は六万六五二二本という記録が残っています。

明治十（一八七七）年以降、広瀬幸平は周辺の山林を購入したり、国有林二万二〇〇町歩を長期借用して植林する方針を打ち出しました。十三年八月には別子鉾山に山林方を置き、限りある森林資源の植樹と育成に専念させました。十五年には別子山中の中七番に一〇九二坪の苗木栽培所を設け、十

六年には政府の山林技師であった染矢讓を雇い入れ、技術指導を仰ぎました。こうして、中七番は別子鉾山の植林事業発生地（現、住友林業フォレスト・ハウス）となったのでした。明治十年から二十六年まで二十七年間の植林本数は、一二五万本余り、年平均すると四万六〇〇〇本余りとなります。明治二十七年伊庭貞剛が別子支配人に就任して、毎年一〇〇万本以上の植林を断行しましたが、その基盤は広瀬幸平が築いたのでした。

明治二十年代に入ると、別子山中や新居浜の惣開に、水套炉や反射炉を用いた洋式製錬所が新設または増設され、薪炭と用材の不足は急を告げていました。東延斜坑では、蒸気式の鉾石巻き上げ機がうなりをあげ、坑道では削岩機が地響きをたてており、もはや薪炭は銅製錬や蒸気機関の燃料として間に合わない時代となっていたのです。明治二十六年鉾山鉄道の開通によって、別子山中へ多量の石炭運搬が可能になると、蒸気機関への薪使用が翌二十七年から廃止され、また製錬燃料も石炭・コークスへの転換が進められまし

た。すでに明治十八年十二月二十八日、広瀬幸平はこのことを予見し、政府から三池炭坑を払い下げてもらおうと思いましたが、四五五万円という高値に当時は手が出ませんでした。ようやく、明治二十七年四月八日、筑豊の忠隈炭坑（福岡県嘉穂郡穂波町）五四万坪を麻生太吉ほかから十萬八〇〇〇円で購入し、石炭事業へ進出したのでした。

## 製鉄・化学事業への挑戦

広瀬幸平の号は「遠図（えんと）」といます。一〇〇年先・二〇〇年先の将来を見据えた事業を企画したいという意味です。

明治十八年十月、新居浜の惣開製錬所を建設中の技師塩野門之助は広瀬幸平に対し、家法で「万世不朽」と宣言した別子銅山も、いつかは鉾脈が尽きるときがくるので、建設中の惣開製錬所を、他鉾山から鉾石を買って製錬する中央製錬所にしたと上申しました。これに驚いた広瀬は、十九年四月東京大学から岩佐教巖教授を招いて意見を聞いたところ、硫黄と鉄分の多い別子の鉾石に着目して、湿式収銅法の採用を

進言しました。その方法とは、まず鉍石を粉碎し、これを焼くときに出る亜硫酸ガスから硫酸を回収します、焼いた焼鉍を水に溶かして銅を採取すると、どんなに品位が悪い鉍石からも銅が取れるのでした。また、その廃液から硫酸銅・硫酸鉄・酸化コバルトなどの化学薬品を回収します、そして最後に残った鉍滓から銑鉄を製造するというものでした。

明治十九年七月、広瀬は岩佐の進言により、水車動力と交通の利便性から新居浜の山根に製錬所建設を着手し、九月には岩佐を住友の工師として雇いました。二十二年、欧米視察から帰国した広瀬は、製鉄・化学工業の重要性を痛感し、翌年山根製錬所の硫酸製造を拡張する一方、同所に製鉄試験係を設置しました。二十五年九月、宮内省へ、「別子鉍山産出品標本」を献納し、化学品や銑鉄を披露しました。二十六年二月には、製鉄実用化のため、惣開の銅製錬所に新居浜製鉄所が併設されました。官営八幡製鉄所に先立つこと七年でありました。

しかし、本業の産銅事業は別として、



**山根製錬所と産出品標本**

別子の鉍石で、製鉄、化学工業の実用化を目指した工場。標本は、宮内庁に献納された。現在、煙突山の愛称で呼ばれる敷地には、別子鉍山記念館が建ち、煉瓦煙突がいまも残る。

製鉄・化学事業は、当時の技術水準では海外に太刀打ちできませんでした。毎年赤字経営が続き、ついに二十七年四月岩佐が退職、十一月広瀬が引退すると、山根製錬所と新居浜製鉄所は閉鎖されてしまいました。

皇居前広場の楠木正成銅像は、その当時の広瀬の気概を最もよく表したモニュメントです。広瀬の本名は満忠といいますが、忠義に満々とする思いは終生変わりませんでした。明治元（一八六八）年、鉍山司の役人として、生野

鉍山に出張する途中の広瀬は、神戸湊川の田園のなかに忘れ去られた楠木正成の墓碑を悲しく思っていました。楠木正成は、鎌倉時代、国家のため後醍醐天皇を守ってこの地で戦死した人です。墓碑は、江戸時代の元禄五（一六九二）年、水戸藩の徳川光圀によって建立されたもので、「嗚呼忠臣楠子之墓」とありました。明治維新となり、天皇の命令によってようやく湊川神社が建立されることを知った広瀬は、神州の正気、まさに消えんとするところ、留めて、公碑一片中に在り」という喜びの漢詩を詠んでいます。わが国の正義がよみがえったというのです。この思いは、明治二十三（一八九〇）年別子開坑二〇〇年記念の献上品が、宮内省や関係先との協議のうえ、別子産銅の楠公銅像と決定したことで実を結んだのでした。



**楠木正成銅像**（明治33年竣工）  
皇居前広場に立つこの銅像は、別子開坑200年祭の記念品である。

## 四、宰平の引退と家族

### 広瀬宰平の引退

広瀬の事業方針は、別子の産物で国益を図り、その事業が住友一家を利するにとどまらず、広く国家社会に貢献するようにしたい」というものでしたが、本業の産銅事業はともかく、製鉄・化学事業は技術や採算性の問題から明らかに失敗でした。実用化には早すぎたのです。明治十二（一八七九）年、宰平は大阪鰻谷の住友本邸に別子産銅で製作した銅の橋をかけました。その理由は、事業は石橋をたいて渡るように、確実を旨としなければなりません」という事業精神を、家長以下の店員、ならびに自分の戒めとしたかったからです。ところが、製鉄・化学事業の失敗が明らかとなっても容易に撤退できないでいる宰平には老いが忍び寄っていました。

明治二十六（一八九三）年九月、新居浜では製錬所の亜硫酸ガスが農作物を枯らす煙害がひどくなり、ついに農民暴動を引き起こしました。翌二十七

（一八九四）年一月には、住友内部から宰平の事業方針は時代に合わない」と批判する人たちが現れました。同年七月、甥の伊庭貞剛が事態を收拾するために別子支配人として赴任しましたが、その解決策は今や宰平の退陣以外に見あたりませんでした。八月二十二日宰平は、家長友純の実兄西園寺公望から住友家の将来に悪例を残さないよう、せつせつと勇退を諭されました。宰平もそれにはまったく同感でしたが、八月二十五日、新居浜の伊庭貞剛にだけは、「年老いた私も、耐え忍びながら養生しているが、西園寺様まで騒がす事態に至ったことに、やり場の無い憤り



新居浜惣開製錬所の煙害

写真（明治30年代）

急速な近代化のため、田中正造も予測できなかったと演説した20世紀初頭の公害問題。別子銅山の煙害問題は、四阪島移転へと展開していく。

を感じている。それが夜ごと夢にでてきて、忘れられないぐらい悔しいのである。十月頃に大阪へ出張されると聞いているが、その日をゆび折り数えて待っている」と、苦渋に満ちた真情を吐露しています。自分の進退について、早く伊庭貞剛と相談したかったのです。十一月十五日に至り、宰平は自ら決断して、住友家総理人を辞職しました。

思えば、広瀬の卓越した指導力によって住友家は危機を克服し、別子鉱山の近代化を達成したのでした。激動期には宰平のような人物を必要としたのです。住友家は宰平の長年にわたる功労に対して、終身住友分家の上席に列し、また総理人の資格をもつて礼遇する」と、その労をねぎらいました。

「五七年夢飛ぶがごとし・・・」とは、宰平引退の辞であります。その心境を最もよく理解していたのが、甥の伊庭貞剛でした。明治二十七（一八九四）年十二月四日、伊庭が新居浜から近江八幡の実家に宛てた書状に、「五七年の寒苦し功勞は現れたのである。功なり名とげて身退くは天の道なりと

申すが、まさにその古語に適中しており、安心喜樂このうえないことである」と記し、五七年間ひたすら住友家と別子銅山の発展に尽くした叔父の引退を心から祝福しています。

### 幸平と家族

明治二十七年（一八九四）年十一月、六七歳で住友家を引退した広瀬は、その挨拶のため長男満正の家族を連れて、



**寿老人・鶴の三幅対** 狩野探幽  
明治27年、住友家から下賜された広瀬幸平の引退記念品。箱書に、この栄誉を子々孫々まで伝えるよう記す。

近江八幡西宿の伊庭家を訪ねました。伊庭貞剛の母田鶴は幸平の実姉でしたし、長男満正の妻米は、貞剛の妹だったからです。天保七年（一八三六）、九歳から単身別子の奉公に出された幸平には、故郷の姉は母のように心安らく存在でありました。同月二十六日の伊庭家宛て幸平の書状では、「このたびの故郷で遊んだ数日間は、いまだかつてない快楽でありました。まったく年老いた姉の心のこもった配慮によるもので、くれぐれもよろしくお伝えください」とあり、姉への感謝の気持ちに満ちあふれています。

豪快な仕事ぶりで知られる幸平ですが、若いときには家庭的に恵まれませんでした。孤独な奉公生活を経て、やっと二七歳で新妻の相と結婚して、広瀬家の夫婦養子となりましたが、その喜びもつかの間、難産により生まれたばかりの女兒と一緒に亡くなりました。後妻の町は、長男満正を出産しましたが、満正四歳、幸平三五歳のときに病気で亡くなりました。ある初夏、新居浜の墓所を訪れたときの漢詩に次のようにあります。



**広瀬幸平一族写真**（明治30年前後）近江八幡の伊庭邸にて  
幸平が長男の嫁と孫を連れ、姉の実家の伊庭家を尋ねたときのもの。中列右2人目から米・幸夫人・幸平・伊庭田鶴・小寿和・多鶴子、2人置いて八重子

前墳は後塚に連なり  
双びてその岡に望む  
艸合するも旧時の色  
花飛ぶも今日の香  
苔痕は碑碣を鎖す  
雨点じて衣装を湿す  
去らんと欲するも杖重く佇む  
徘徊の情緒長し

意識すると、「前妻の墓は、後妻の墓に連なり、その岡を望むと二つ並んでいる。夏草は生い茂っても、昔と変わらず、花は飛び散っても香りは残っている。墓碑は苔むし、雨がしとしと降って着物がぬれる。立ち去ろうと思っても、後ろ髪を引かれる思いで杖をもつてたらずんでいる。心はおろおろするばかりで落ち着かず、追慕の念が消えないのである」ということになるでしょう。幕末・維新期の宰平は、幼い長男を新居浜の養母に託し、住友家の家事に、あるいは国事にひとり奔走しました。三番目の妻幸を迎えたのは明治八（一八七五）年、宰平四八歳のときでありました。二〇歳も年下の幸は、宰平の北海道旅行やヨーロッパ・アメリカ旅行に名刺を持って同行するなど

活動的な女性でした。その後、妻の幸は宰平が亡くなるまで側に付き添い、幸せな晩年を過ごしました。

### 最後の逆命利君

明治二十八（一八九五）年三月、宰平は重要な職務を果たしてきた者の責任として、自伝『半世物語』を刊行しました。後輩の戒めとしたかったからです。この本は現在もなお、すぐれた「企業者自伝」の草分けとして評価されています。宰平は歴史に学び、そしていつも将来のことを考えていました。かつて、明治二十年宰平は、別子山上での職員一同に対する演説の中で、「私は、種まく人であります。諸君はその花を愛で、その実を食してほしい」と



半世物語（明治28年）

広瀬宰平自伝。明治20年、宰平は街区区仁から「自叙伝は、責任ある地位に就いた者の責務」と、欧米での慣習をさらされたことが、その動機となった。現在でも、優れた起業家自伝として評価されている。



広瀬宰平（明治28年頃）

引退間もない168歳のころ精悍な風貌に変わらない

述べています。幕末期、宰平が採鉱関係の役職にあつたとき、地震で水没した別子坑内最下部にある三角富鉱帯の排水を企画しました。生前には完成しないと置いていたところ、二十八年二月、三十五年ぶりに水を引き干し、みごとな鉱脈が出現したとの報告が、別子からもたらされました。宰平は喜びの余り、同年三月別子鉱山職員一同に感謝の手紙を送りましたが、そのなかで、「これは単に住友家だけの富貴ではなく、国家的な富貴である」と祝しています。事業というものは、自分たちだけのためではなく、次の世代に役立つよう心がけなければならぬという、メッセージなのです。

明治二十九年三月、広瀬宰平は、新



居浜惣開製錬所の四阪島移転を聞いて、「今や引退して、住友家の経営方針に對して、くちばしを差しはさむ権利はないが、知っていて言わないことの不忠の罪は、これよりもなお大きいのである」と、あえて反対の上申書を住友家に提出しています。それは、当時の別子支配人伊庭貞剛が、亜硫酸ガスの煙害による農作物の被害を全面的に解決するため、新居浜の沖合い約二〇キロの四阪島に製錬所を移そうとしたからです。反対の第一の理由は、二〇〇年間お世話になった新居浜を捨てて四阪島に移転することは、地域社会との信頼関係に反するからというものでした。水でない無人島に、工場や労働者を移すには莫大な経費が掛かることも、その反対理由に挙げています。幸平は、損害賠償という解決方法も視野



**伊庭貞剛** (住友史料館所蔵)  
弘化4年～大正15年 (1847～1926)  
住友家2代総理事、近江八幡出身別子山中への植林や製錬所の四阪島移転、抗水路の建設など、別子銅山の環境対策に活躍した。



**四阪島製錬所** (明治39年) (住友史料館所蔵)  
移転をめぐって広瀬と伊庭は対立したが、どちらも地域住民を思う真心からであった。

ます。結局、伊庭は当初の方針通り、四阪島への移転を断行しました。製錬所の移転もまた、地域住民のことを考えた結果でした。ただし、広瀬の上申書も配慮して、新居浜に産業が根付くよう努力し、海抜約八〇メートルの東平から国領川に鉱毒水を流さないよう、長さ一六キロのレンガ造坑水路を建設しました。事業は、国家社会のためであり、地域社会とともに共存・共栄しなければならぬということをし、広瀬と伊庭は身をもって示したのでした。

に入れて、亜硫酸ガス以外の鉱毒水の坑水路整備や、漁業補償の問題など総合的に解決しなければならぬとい

### 晩年の幸平

明治三十年(一八九七)以降、幸平は須磨に隠棲しましたが、広瀬本邸のある新居浜ではなく、この地を選んだのは、家長友純の家族が須磨別邸に生活することになっていたのでした。終生住友家の番頭をもって任じた「臣幸平」の面目躍如としたところです。ひ孫のつぎ子氏は、生前に幼少のころに須磨を訪ねた思い出の中で、「幸平爺は、読書に書写・義太夫と悠々自適の生活を送りました。たまに私どもが遊びに参りますと、沖合の大阪商船の船影を見つけ、自らが考案した商船マークを見るよう望遠鏡を勧めたものです」と、懐かしそうに語っておられました。また、須磨の屋敷に行くときのお土産は、神戸で好物の鰻とシュークリームを買っていったそうです。幸平には、そん



**広瀬幸平** (大正2年)  
最晩年の写真。置いてもなお、国家に対する忠誠心は変わらない。

なハイカラな部分もありました。

大正三(一九一四)年一月三十一日、幸平は須磨で八七年の生涯を終えましたが、その前年に「逆命利君、謂之忠」と書き残しています。終生、国家と主家に対する忠誠心は忘れなかつたのです。甥の伊庭貞剛は、幸平の姉である母田鶴に、叔父の死を知らせるべきか迷つたそうです。高齢の母によけいな心配を掛けまいとしたのですが、とうとう思い切つて切り出したそうです。そうすると田鶴は、「あのひともなくなくなつたか、それはよいことを知らせてくれた……、これほどめでたいことはない」と語つたそうです。その意味するところは、自分の信念をもつて、人のために精一杯生き抜いた人の死は決して悲しむべきではなく、むしろ祝つて喜んであげなさいということでした。母のなにげない言葉のなかに、貞剛は「死」というものの本質を理解し、晴れ晴れとした気持ちで幸平叔父を見送つたそうです。

同年二月二十一日、大阪の四天王寺で幸平の住友家葬がありました。茶毘に付された遺骸は、大阪実相寺の住友



広瀬幸平墓所  
新居浜市山田の高台から、  
新居浜市街を見下ろす。

家墓所に葬られ、ゆかりの大阪阿倍野(現在、瓜破)と、新居浜(角野山田)の広瀬家墓所、近江八幡の北脇家墓所に分骨埋葬されました。新居浜の墓所は、レンガ塀で囲まれ、北東と北西の隅には遙拝所があります。穴のあいた二つの石塔から、生家があつた滋賀県の八夫村と、養父母の自宅があつた新居浜金子村を、はるかに拜めるようになっていきます。幸平の法名は、広照院寿山保水居士、ここで一族に囲まれながら静かに眠っているのです。

### エピソード 新居浜広瀬邸の望煙楼

現在、愛媛県新居浜市の高台に広瀬邸が市立公園として残っています。その母屋二階を幸平は望煙楼と名づけました。そこからは新居浜市街と瀬戸内海を一望することができます。眼下の惣開には、幸平が別子開坑二〇〇年を

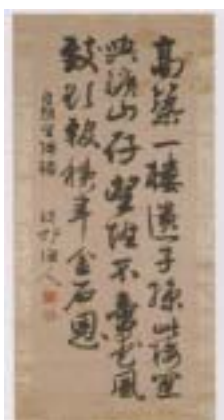


惣開の石碑 (明治23年建立)  
別子開坑200年の記念碑。工都新居浜の発展を予見。現在、住友化学歴史資料館の玄関脇に立つ。

記念して建立した石碑が残っており、「是地や南鉾山を負ひ、北海湾に臨み、最も舟車に便なり」と工場群誕生の由来を刻んでいます。いわば工都新居浜と、そこから派生した住友グループ発祥の記念碑なのです。

今からおよそ一〇〇年前、幸平は発展する町を眺めながら「望煙楼」と題する漢詩を詠みました。

高く一樓を築き、子孫に遺す  
此の楼宜しく鉾山とともに存すべし  
望煙ただに風致を愛でるのみならず  
報いんと欲す、積年金石の恩



望煙楼の軸 広瀬幸平  
廣瀬邸母屋の2階を「望煙楼」と名付けて詠んだ。  
工都新居浜の発展は、別子銅山であると論ず。

意識すると、「高く一つの楼閣を築いて子孫に遺す、鉾山とともに末永く存続してほしいものだ、この楼閣から遠く瀬戸内海を航行する蒸気船や、惣開製錬所の煙たなびく景色を見て、ただ愛でるだけではいけない、その発展を長年支え続けた別子銅山の恩に、どうか報いてほしい・・・」ということになるでしょう。

現在、この広瀬邸は公園として市民の憩いの場となつています。今日の意味で解釈すると、冒頭の「子孫に遺す」の子孫とは、この新居浜の人々であり、ここから世界に羽ばたいた住友グループの人々ということになるでしょう。

昭和四十八（一九七三）年、別子の山は永遠の眠りにつきましたが、近代化の苦闘を物語る遺跡は、現在もここかしこに残っています。幸平は、この望煙楼を通じて、発展と繁栄のルーツが別子の山にあることを忘れないでほしいと、私たちに語りかけているのです。



**旧廣瀬邸**（明治22年竣工）  
近代和風建築として、第一級の作品。  
明治23年には、別子開抗200年祭の迎賓館となった。

**広瀬歴史記念館**（平成9年竣工）  
平成の望煙楼と共に、広瀬幸平の偉業を今に伝える。

### 参考文献

- ・広瀬幸平自伝『半世物語』（明治二十八年、昭和五十七年住友修史室復刻）
- ・広瀬満正『幸平遺蹟』（幸平の伝記、大正十五年、平成十二年大空社出版から復刻『伝記叢書三一九巻』）
- ・『住友春翠』（住友友純伝記、昭和三十年）
- ・西川正次郎『幽谷』（伊庭貞剛伝記、文政社 昭和

- 和六年 昭和五十六年住友修史室復刻）
- ・『住友別子鉾山史 上巻』（住友金屬鉾山株式会社 平成三年）
- ・『住友林業社史 上巻』（住友林業株式会社 平成十一年）
- ・旧広瀬邸文化財調査委員会『別子銅山の近代化を見守った広瀬邸』（新居浜市 平成十四年）
- ・末岡照啓「江戸浅草米店支配人広瀬義右衛門義泰について」（『住友修史室報』第八号）
- ・同「幕末期の住友」（『同右』一六号）
- ・同「明治維新期の住友（1）（2）」（『住友史料館報』二〇・二二号）
- ・同「明治二十年別子山上における広瀬幸平演説」（『同右』二二号）
- ・同「幕末維新期、新居浜上原の新田開発と広瀬幸平」（『同右』一七号）
- ・同「明治勲章を受賞した東の渋沢栄一、西の広瀬幸平」（『青淵』五八八号）
- ・同「近代蚕糸事業における渋沢栄一と広瀬幸平」（『同右』六一号）
- ・同「十九世紀末、別子鉾山の環境対策に挑戦した伊庭貞剛」（『住友史料館報』三二号、『日本史学年次別論文集 近現代（平成十二年版）』朋文出版 二〇〇三年 所収

## 補遺 宰平銅像の復元

平成十五（二〇〇三）年三月、広瀬歴史記念館の玄関前広場に広瀬宰平銅像が復元されました。その起源をたどると、明治三十一年（一八九八）年三月、住友家が「古きことまねなり」として、広瀬宰平七〇歳の古希を祝って、別子産銅で等身大銅像を造り贈ったものです。

明治二十九（一八九六）年十二月十八日、住友家は東京美術学校（現、東京芸術大学）に広瀬宰平の銅像を依頼しました。その形態は、先に依頼した松方正義・川田小一郎と同様の品と記しています。依頼に前後して住友家は、宰平に立像の容姿は、どのようなものがよいかと問い合わせています。これに対し宰平は、同年十二月二十七日の書状で「立像にて西洋装、但しフロッツコート着服」と答えています。翌明治三十年二月十六日、東京美術学校は宰平銅像の見積書を住友家へ送っています。これによると、等身フロッツコート（ト）の立像は、木型着手の一年後の完成予定であり、製作費は一二五〇円、素銅六〇貫目（二二五キロ）は現品納

入という条件でした。契約は、同月学長の岡倉天心（覚三）と結び、製作は、楠正成銅像を担当している彫刻科教授高村光雲と、鑄造科教授岡崎雪聲が担当することになりました。同年五月三日、東京美術学校は、木型彫刻の参考のため、宰平の写真を至急送ってほしいと住友家に依頼しました。同月七日、住友家は宰平の写真四枚（正面・背面・側面）を同校に送付しましたが、その容姿は、宰平の希望するフロッツコート姿で、帽子をかぶり、杖を持っていました。銅像は、広瀬邸庭園に設置する予定なので、写真通りに鑄造してほしいとも希望しています。

明治三十年十月、美術学校から木型原型がほぼできあがったので、細部を調整するため、宰平本人の上京を希望する書状が届きました。宰平は十月二十日上京する予定でしたが、不快のため上京できなくなり、担当者の来阪を希望したところ、同月二十三日高村光雲が出張することになりました。ところが、その後どういいう経緯があったのか不明ですが、この彫刻は不採用となり、初めから作り直すことになってし

まいました。

十一月九日、東京美術学校は住友家に「来年二月までに銅像を作ってほしいとの依頼ですが、今日から木型彫刻に着手するわけですから、期限までの完成はむずかしく、三月いっぱい掛かるでしょう。また、等身大像は燕尾服というのですが、その着服した写真を送ってほしい」と再度依頼しています。当時宰平は旅行中だったので、ようやく十二月七日に燕尾服姿の写真が出来上がり送付することができました。おそらく、宰平の希望した容姿より、民間人初の明治勲章受賞の容姿がふさわしいと住友家が判断したのでしよう。翌、明治三十一年二月一日、美術学校から住友家へ、近日中に高村光雲作の木型原型が完成するので、銅六〇貫



復元された広瀬宰平銅像  
平成15年、宰平曾孫から新居浜市に寄贈された。高村光雲の出身、東京芸術大学で復元。

目と内金六〇〇円、それから台座の銘文を送ってほしいと依頼がありました。三月二日、広瀬宰平の功績をたたえる住友吉左衛門友純の銘文が、つぎのように美術学校へ送付されました。

広瀬宰平翁、歴史我家六代恪勤励精、五十有七年若一日、以恢興事業扶殖家道、今茲翁寿躋古希、乃用別子精銅鑄其肖像、併勒其功以贈焉

明治三十一年三月

從五位 住友吉左衛門友純識

意識すると、広瀬宰平翁は住友家六代の当主に仕え、力を尽くして勤務に励まれました。その五七年間は、一日のように早く感じられます。明治維新の苦境にあつて、事業を恢復・復興させ、今日の発展の基礎を築かれました。今ここに宰平翁が古希を迎えられたので、感謝の気持ちを込めて別子の精銅を用いて肖像を鑄造し、その功績を記録して贈呈します」という意味になるでしょう。

明治三十一年四月五日に至り、広瀬宰平銅像が完成しました。銅像は、直ちに美術学校で丁寧な荷造りされ、四



広瀬宰平銅像  
明治31年、宰平の古希記念に住友家から贈呈された。

月六日午後六時二〇分発の新橋発大阪行きの列車に積み込まれました。四月七日、広瀬宰平銅像は大阪の住友家に到着し、それから七月ごろ新居浜の広瀬邸へ設置のため贈られたのでした。当初は、和風庭園の心字池前に玉砂利を敷いて、その上に置かれていました。が、大正八（一九一九）年八月ごろ南庭と呼ばれる洋風庭園の南東隅に、自然石の台座築き、その上に安置されてきました。ところが、昭和十八（一九四三）年十月、第二次世界大戦の軍需物資として献納され、今日に至つていたのです。

生前、故広瀬つぎ子氏は、曾祖父宰平翁の銅像復元を希望しておられました。その遺志はご令嬢方に引き継がれ、平成十三年五月、木型原型所蔵の東京

芸術大学に依頼し、全面的なご協力のもと本年三月完成したのであります。芸術大学では、木型で欠損していた勲記を持つ右手と胸の勲章を精緻に復刻、一〇〇年前と同じ日本古来の「真土型鑄造」という技法を用いて忠実に復元していただきました。鑄造用の銅は、住友金属鉱山株式会社の別子事業所寄贈のものを、これに住友家からいただいた別子開坑二〇〇年記念の文鎮（東京美術学校製）を混ぜて、別子銅山の魂を鑄込みました。

この銅像は、広瀬家から新居浜市に寄贈されましたが、まさに本年は、新居浜市と別子山村の合併という記念すべき年であります。広瀬宰平の別子銅山近代化によつて、現在の工都新居浜が誕生したことを思うとき、感無量のものがあります。広瀬邸の主人が半世紀ぶりにわが家へ帰ってきたのです。広瀬邸の望煙楼とともに新居浜の、ひいてはわが国の発展を見守り続けることとしましょう。

出典 「楠公銅像献納二関スル書類附川田男爵・広瀬翁・松方伯爵銅像」（住友史料館所蔵）。

（終）

## あとがき

この小文は、本年三月二十九日の広瀬宰平銅像除幕式に合わせて書き上げたものです。昭和五十三年、新居浜広瀬邸で御当主の故広瀬つぎ子様にお会いして、史料を見せていただいたから早二五年の歳月が過ぎ去りました。平成九年四月には、新居浜市広瀬歴史記念館がオープンし、広瀬宰平の業績が広く知られるようになってまいりました。二〇世紀末から今世紀にかけて、わが国は厳しい経済状態にあります、広瀬宰平の時代をもう一度振り返って、今後の指針にしようという動きがあります。さらに、広瀬が断行した別子銅山近代化の諸事業は、いまや国によって近代化産業遺産として再評価されつつあるのです。こうした時期に、広瀬宰平のことを広く知っていただくことは有意義だと思えます。

広瀬宰平の伝記には、自伝の『半世物語』や、長男の満正が著した『宰平遺績』という立派なものがあります。しかし、その後の研究によって新しい事実も出てきたので、部分的に『住友史料館報』に連載し、また『住友別子

鉱山史』や『住友林業社史』のなかで公表してきました。これをベースに、一般向けには『住友人物列伝 広瀬宰平』（季刊誌『すみとも』第九号）一冊号連載、インターネット「住友人物列伝」<http://www.sumitomo.gr.jp/committee/act/person>（参照）としてまとめました。伝記とするには、不十分ではありますが、今回、銅像の除幕式に当たり、あえて一文を草した次第です。先に『伊庭貞剛 別子全山をもとのあおあおとした姿に』を刊行し、ご好評をいただいたので、今回も中高生を含めた一般読者向けに平易な文章としました。この小文によって、一人でも多くの方々に広瀬宰平を理解して頂ければ幸甚に存じ上げます。

編集に当たり、久葉裕可氏ほか館員の皆様には大変御世話になりました。写真掲載については、住友史料館のご協力を賜りました。記してここに感謝申し上げます。

（平成十五年三月 著者識）

（奥付）

広瀬宰平小伝

問はんと欲す国家経済のこと

平成十五年三月二十九日発行

著者 末岡 照啓

編集 新居浜市広瀬歴史記

念館

発行 〒792-0046

愛媛県新居浜市上原

二丁目一〇番四二号

TEL(0897)40-6333

FAX(0897)40-6334